

国崎クリーンセンター利用者十万人達成、エドヒガン群生林整備記念事業
記念講演会『北摂の原風景』

「里山の衣文化」纖維が語る歴史と風土

講師 前川 善一郎

二〇一五年三月二十二日（日） 国崎クリーンセンター ゆめほたる

国崎クリーンセンター利用者10万人達成、エドヒガン群生林整備記念事業
記念講演会『北摂の原風景』

里山の衣文化～纖維が語る歴史と風土

2015年3月22日（日）国崎クリーンセンターゆめほたる



講師 前川 善一郎

日本纖維機械学会フェロー代表／

京都工芸纖維大学伝統みらい教育研究センター特任教授

本日は、この施設内で講演会と併催して「ステナイデア・ファイバーフェスタ」を催しています。纖維材料を扱っている「日本纖維機械学会」では、「ミスター・ファイバーマン」（ファイバー・纖維の意）と称する纖維の伝道師たちが、全国に纖維のすばらしさを伝えていますが、その運動の一環です。記念講演会の方では、纖維材料がいかに衣食住の中の「衣」に貢献しているかを様々な文献を基にお話したいと思います。

里山の定義

まず、本講演の全体のテーマでもある里山の定義からお話しします。里山の「里」は、大自然に対して人の住む所、里山の「山」は森林という意味。そうすると、里山というのは大自然と都市との中間にある空間、と位置付けされます。環境省では里山のことを「里地里山」という呼び方をしています。

「北摂里山」は、インターネットの情報によると、三田市、能勢町、猪名川町、豊能町、川西市、宝塚市、伊丹市等が範囲で、大阪神戸などの大都市に非常に近接しているのが特徴、と書かれています。地形的に見ますと（図①）、川西、池田、宝塚、ここに伊丹台地があります。そして猪名川と武庫川があります。この二つの川が運ぶ土砂によって平野ができました。それで縄文時代から弥生時代にかけての主要な遺跡が、黄色の点の場所です。遺跡から、猪名川沿いの平野に人間が住んでいて、伊丹台地の裾野にも人間が住んでいたことが分かると思います。

能勢の民家

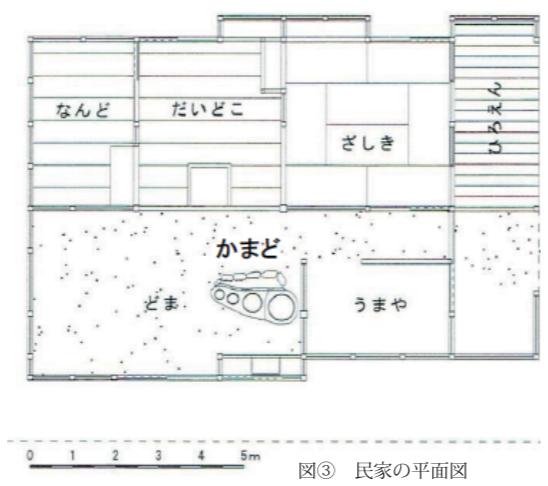
こちらは、服部緑地にある「日本民家集落博物館」に、摂津能勢から



図① 北摂地域の地理と主要遺跡（黄色の点）



図② 能勢の民家（日本民家集落博物館）



図③ 民家の平面図

生活していたということです。外見は立派だけれども、住んでみたら冬は寒いだろうな、ちょっと生活しにくいかな、と感じました。園内には他にもすばらしい民家がたくさんありますので、興味があればぜひ見学に行ってみてください。

衣文化を支えた三つの纖維

文明社会で人間が住む以上、衣食住全てを賄う必要があります。その中の、衣の文化は纖維材料がサポートしてきました。

古来、日本の衣文化を支えてきた三つの天然の纖維材料があります。苧麻、いわゆる麻。木綿、絹、この三つの纖維材料が私どもの衣料の材料でした。

移築された民家の写真です（図②）。昭和三十四年に、能勢の民家が取り壊されるという話がもちあがり、それはもつたないと博物館に移築されました。この建物は江戸時代の面影を強く残している、大阪府内でも最古の民家と言われています。

同家の平面図（図③）を見ると、ここが入り口で、「ひろえん」があり、「どま」になっています。そして、ここに八畳の「ざしき」、そして台所の板の間、それから納戸の板の間、という配置図になっています。ここに「かまど」がセットされています。お風呂は、入り口のところに五右衛門風呂があったそうです。お便所は外だそうです。寝室はなく、この「なんど」の板の間に寝ていました。

ここに「うまや」ということがあります。ということは、動物と一緒にここにいました。

続けても三反から四反、多くても五反ぐらいしかできませんでした。一方では、幅が三十センチ、長さが九メートルで、着物が一着できるくらいのものです。半年かけてもこれぐらいしかできなかつた能率の悪い、過酷な労働を当時の女性はやつていたわけです。

麻は衣料として最適か

そのようにして麻の材料が作られるのですが、麻は衣料材料として最適だったのでしょうか。

麻の衣は、先ほどの機械的な性質から分かるように、とても強靱きょうじんです。

しかし、弾力性がありません。ほとんど伸びない。ですから肌にぴったり合わないので。これは夏の衣料としては良いのです。隙間があるから、風が入ってきて涼しい。けれども、麻で一年中過ごすと、特に冬の衣料としては落第です。しかし、落第だからといって他のものに代えるわけにいきません。これしかありませんから。

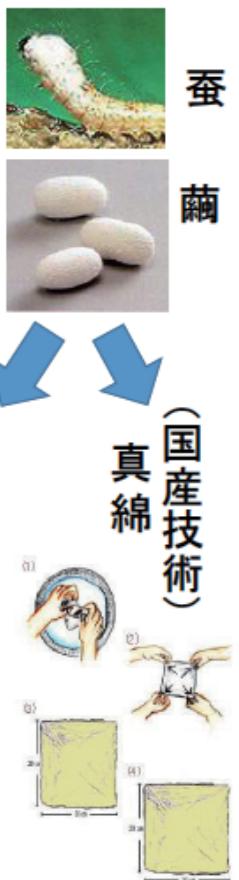
有名な山上憶良の「貧窮問答歌」に麻が出てきます。

「寒くしあれば麻ボナマ衾引きかぶり、布肩衣有りのことごと服襲きへども、寒き夜すらを我よりも貧しき人の父母は飢え寒ゆらむ妻子よどもは吟び泣くらむ」

当時は麻の衣料しかありませんから、冬にいくら重ね着しても隙間から冷たい空気が入って、寒くて、これは寝れない、という生活を強いられていたようです。

衣の女王・絹の話

次に三つの材料のうちの二番目、絹の材料についてお話しします。絹はいつ頃日本に伝わったのです。古代から現在まで、正に衣の材料の女王です。絹はいつ頃日本に伝わったのですが、当時は階級社会で大変でした。



絹糸(渡来技術)

たのでしょうか。

野生の蚕のことを野蚕と言います。蚕が成虫になるときのさなぎが繭です。繭の中にいる蚕を放り出し、その周りの絹を引っ張ると立派な布ができます。これを真綿と言い、縄文時代、国産技術として真綿の生産技術を持っていました。

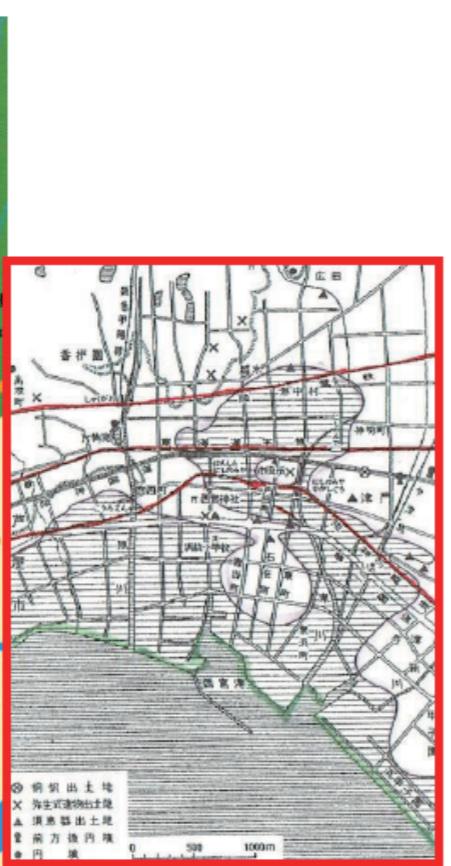
しかし、紀元前四世紀から三世紀頃、縄文人が住んでいた日本に南シナ海の方から弥生の人たちが新しい技術を携えてやってきました。そして、もともと住んでいた縄文の人たちの子孫と混血しながら全国に広がっていました。これを真綿と言います。この弥生の人のもたらした水稻コメとお米を作る技術と、桑による養蚕ヤシノミと絹糸の作り方が日本各地に伝えされました。絹には、蚕、繭から纖維を作る二つの方法があるのですが、この真綿の方式は国産の技術、蚕から細い糸を取り出して、糸にして織物にするのが渡来技術ということになります。

ここでまた万葉集の歌です。

しらぬひ筑紫の綿は身につけていまだは着ねど暖かに見ゆ

(万葉集三一二三三六)

これは綿めんと読みますが木綿ではなく、その当時は真綿のことです。新し



図⑧ 現在の北摂の地図



伊居太神社



呉服神社

い技術で作られた衣服を着たことはないけれど温かいだろうねというこ

とです。そしたら、これを一般の庶民も使つたら良いではないというこ

とになるのですが、当時は階級社会で大変でした。

北摂里山と衣の文化の関係

弥生時代の末期、中国から機織りの技術が伝わりました。養蚕や機織りの技術を日本に伝えるため、中国の吳の国に人材派遣を求めて行き、その要望に応えて四人の姉妹が招かれて日本にやってきました。そのうちのお二人の名前が呉織媛くわおりひめと穴織媛あなおりひめです。この四人が上陸したのが、武庫水門むこみなくちです。これが現在の地図です(図⑧)。瀬戸内海の海岸線、左が武庫川で、右が猪名川から神崎川になります。当時はそれほど土砂が堆積していませんので、海岸線はもつと北にあります。瀬戸内海の海岸線、周辺を拡大した図が右です。ここに湾があります。摂津の方から見ると、武庫川にある最初の港ということで武庫水門と名付けられたそうです。四人の招かれた女人たちは武庫水門に上陸して、川沿いに猪名川の上流を上り、現在の池田市の五月山の麓でこの技術を伝えたと言われています。そんなことから、今の池田市には呉織媛を祀る呉服神社、穴織媛を祀る伊居太神社があります。

また、伊丹という地名の由来ですが、「糸積み」の里ということから

伊丹という名前が生まれたと言われています。これほど衣の文化を日本に伝えた土地だから、シルクロードの終着点は奈良ではなく池田だと主張する人もいます。こうした歴史を根拠にして言われていると思うのですが、私も伊丹に住んでいますのでその説を探っています。

染色技術の進歩

衣の文化は纖維材料が受け持っていますが、纖維材料だけでは駄目で、それを染める必要があります。染めることによって女性はより美しくなりますし、染色の技術と纖維材料がマッチして進歩していきました。染色技術は弥生時代、里山で生まれました。いわゆる草木染めの誕生です。最初は、里山に自生する草木の汁液や、花などを直接纖維にすり込む「摺染」すりぞめという技術で染めが行われました。

その後、中国・朝鮮から新しい染色技術が伝えられ、明礬や硫酸銅などを使って媒染^{ぼいせん}することによって、確実に纖維材料と化学結合させる媒染技術がもたらされたわけです。一旦染めた染色が何回洗っても落ちないという、いわゆる草木染めの技術がここで確立しました。これが弥生時代です。

当時自生していた草木から、赤色とか黄色、紫、青、緑、黒、ねずみ、

茶色などいろいろな色を染めることに成功しています

草木染めの原料
赤色：茜草、紅花
紫色：紫草
黄色：黄蘖
青色：藍草、山藍

藍染めは非常に巧妙な化学反応を利用して作られています。この藍草の葉を乾燥させて「すくも」が作られるのですが、これがインジゴという名前の染料です。これは水に溶けないので。普通、水に溶けないと染められませんね。だから、染めるためにもう一工夫します。カメに入れて発酵させると、今度はそれが還元されて、水に溶ける材料、黄色い物質に変わります。その状態で水に溶けるので纖維を染めることができます。染めた後、空気にさらすと今度は酸化が起こり、元のインジゴの染料に戻り、すばらしい藍色が誕生するわけです。こういう技術を、昔の人たちはおそらく経験から作った。そう思うと、頭が下がります。





山藍の葉

感動を見せたいと、私たちのグループの八十歳を超えた二人と、もう一人の仲間が藍染め実験をしています。実験を見てもらつて、黄色から青に変わる一瞬の、小中学生のあつという目の輝き、この一瞬で全ての苦労が報われています。

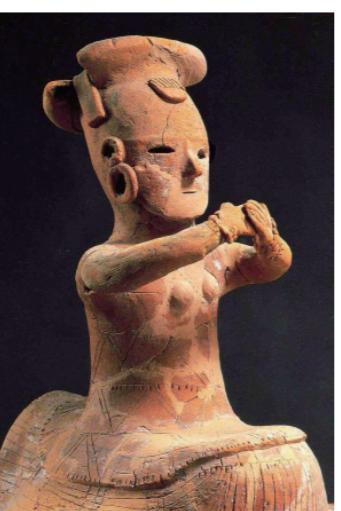
律令国家における染色の支配

奈良飛鳥時代になると、いわゆる律令国家になり、市民の階級が明確に分かれます。一部の支配階級と多くの庶民・奴婢に分けられるわけです。そして、庶民・奴婢から税金が徴収されます。祖・調・庸ようという税制です。祖はお米、調はその土地の特産物、庸は労働です。ところが、遠方の国の人々は奈良まで労働に行くことができないため、労働に代わるものとして、多くは「軽物」と言われる麻の布、絹、真綿で納めました。絹とか真綿は全て税金で取られるため、苦労して作つても自分たちが着ることはありませんでした。麻も、自分たちが着る以外のものは、税金として取られました。

奈良の政府の、宮内庁の中に「内染司ないぜんのつかさ」という役所があり、ここで染色を一手に引き受けていました。奈良の政府は絹を支配し、なおかつその色を支配していくことになります。



図⑩ 古墳／奈良時代の衣裳
(京都染色まつり 1984)



図⑨ 古墳時代後期の巫女の坐姿はにわ

「天下の百姓に黄色の布を服せ、奴には皐衣を服せ」
すなわち、身分の低い庶民は黄色の衣服を着せ、奴婢、奴は男性の奴隸、婢は女性の奴隸ですが、奴婢には黒い衣服を着なさいという命令です。この黒とか黄色は非常に染めやすい材料だったのだと思います。上のランクの紫などは作り方が難しいそうです。この時代、色によって階級を分けたのですが、こうした色分けも染色技術が確立していたからできたわけです。

飛鳥奈良時代の富裕層の衣裳ですが、群馬県から出土したはにわの中にも、こういった衣装をまとつたものがあります（図⑨）。

こうした出土品を基にして復元したのがこの写真です(図⑩)。

これは京都の染色まつりの写真ですが、こんな衣服を着れるのは上流階級の御婦人です。こういう華やかな衣裳を纏つた御婦人が、しゃなりしゃなりと、都大路を歩いておられたのではないかと思ひます。

飛鳥時代以降、人々にランクが付けられるようになりました。身分の高い家に生まれた人に良い仕事を与える「氏姓性」ではなく、有能な人をどんどん採用しましようということで、冠位十二階を定めました。有名な聖德太子が制定した日本で初めての冠位です。その十二階の身分の色分けを六色・紫・青・赤・黄・白・黒、それぞれの色の濃淡十二段階として、個人の階級が分かるようにしたわけです。そして六九〇年、持統四年に以下の命令が出ます。

一方、庶民は全く異なつた暮らしでした。

緑色：青色染料と黄色染料の重ね染め
黒・鼠^{ねずみ}：茶色：タンニンを含む種々の雑木

ここでは特に、青色を取り上げたいと思います。というのも、先ほど申し上げました「ファイバーマン」、私たちの仲間がハンカチの藍染め

ちょっと驚くべきお話をしたいと思います。「おあむ物語」という、おあむという女性の日記があります。戦国時代から江戸時代の初めに生きた女性ですが、父親は戦国武将の石田三成の家来・山田去暦で、三百石の知行を受けた侍です。三百石というと当時の中流階級ですから、おあむさんは中流階級のお嬢様ということになります。そのおあむさんが、

二十歳の頃に関ヶ原の合戦で大垣城に籠もったときの絵がこちらです（図⑪）。

シヨツキングな絵です。味方が獲つてきた敵方武将の首に死化粧する役目は当時の女性の役目でした。

そのおあむさんが当時の衣の生活を記した一文があります。皆さんはどういう感想を持たれますでしょうか。

「さて、衣服もなく、おれが十三の時、手作りのはなぞめの帷子一つあるよりほかには、なかりし。そのひとつのみを、十七の年まで着たるによりて、すねが出て、難儀であつた。せめて、すねの隠取りの中流階級のお嬢様が「着たきり雀」です。もちろんこれにはやと、おもほた。」



図⑪ 「おあむ物語」挿絵

二十歳前のお化粧もしたいだろう年頃のお嬢さん、それも三百石取りの中流階級のお嬢様が「着たきり雀」です。もちろんこれには戦時下という特殊事情もあります

た。戦争に全力集中させないといけないから、おまえは我慢しろということが背景にあったと思いますが、もう一つの背景に、戦国時代まで衣服の材料としては苧麻しかなかったということがあります。先ほど言ったように、苧麻は非常に生産性が悪く、一人に何着も当たらなかつたのです。

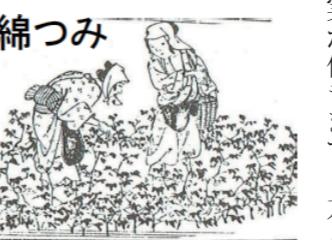
ところが、江戸時代になるとこういう文章に変わります。

「このやうにむかしは、物事ふ自由な事でおじやつた。今時の若衆は、衣類のものずき、こころをつくし、こがねをつひやし、沙汰の限りなこと。」

よく、お年寄りが今どきの若者は…と言いますが、ここにも背景があります。おあむさんが年を取りつた後の衣服は、麻から木綿に代わっています。木綿に代わると、飛躍的に生産性が高まりました。そして、とても安く手に入るようになりました。だから、庶民でも何着も手に入れることができるようになつたのです。ただ年寄りが今の若者はね、と言つてゐるわけではありませんので、ちょっと注釈を加えておきます。

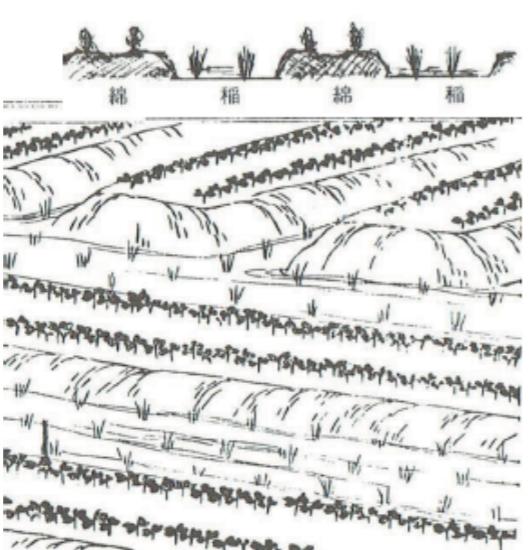
江戸時代の庶民の衣文化

江戸時代になると庶民の衣料の材料は、麻から木綿に変わります。木綿の栽培法は、田植えが終わる五月の中旬頃にまず綿の種まきをします。そして八月頃に黄色い花が咲いて、それが落ちると実が付きます。九月



以降この実がはじけて、綿花、コットンボールができます。この状態になつて、綿つみをします。

これが当時の水田の風景と断面図です（図⑫）。



（12）。高いところと低いところ二つに分かれている、この低いところに水稻、お米を作りました。そして、高いところに綿、木綿の木を植えたわけです。これを半田法と言います。そして綿を摘むところまでが農家の人たちの仕事でした。

図⑬が麺布づくりの工程です。

- ①綿くり（綿と種を分離する）
- ②綿うち（伸ばし巻物状にする）
- ③糸くり・糊付・染め
- ④縦糸を整える
- ⑤布を織る

これらの工程の後半



異弥左衛門さんは、三町歩を超える規模の農地を所有していました。人口約三百五十人の野間村で、上位三位か四位にランクするお金持ちだつたそうです。そして、自分たちで作る

土地と、小作人たちに作ってもらう小作地に分けた経営っていました。七人家族で、十

人程度の奉公人と日雇いを雇つて、手作り地で農業を営んでいる。表作と裏作で、表作はお米と木綿、裏作は麦と菜種を作っていました。

これは一年のだいたいのスケジュール表ですが、お米が五月の中旬から十月まで、田植えから始まつて刈り入れまで。そして、それとほぼ同時進行で、少し先駆けて木綿の栽培、種付けから刈り取りまでが、今で言う半田法で作られています。刈り取った後、稻田の方は菜種を作り、菜種油を探りました。もう一つの木綿畑はこれを刈り取つた後、麦を植えています。一年を通して農事作業をされていたことが分かります。

御承知のように一八六七から六八年、明治政府が開かれました。「農事日誌」は一八六二年から一八七二年ですから、弥左衛門さんは正に動乱の時代を生きたことになります。異弥左衛門さんの屋敷から北に約一・五キロのところに西国街道が通っています。街道の西に幕末の政局をリードする長州国があり、東に維新の舞台となつた京都があり、多くの歴史上の人物がこの西国街道を往来したのではないかと想像します。

そういう動乱の時代ですが、この「農事日誌」には、動乱の歴史があまり出て来ません。普通の庶民は歴史とはちょっと違つた静かな生活をしていたのではないかと思います。

そこで一八六四年の一年間、彼らはどういう生活をしていましたかをタイムスリップしてみたいと思います。



着物



サリー



スーツ

柔軟性 ← → 剛直性

で、着物文化と環境という観点で締めくくります。

着物は、鎌倉時代以降、小袖を持つ様式が定着して今のような形になりました。

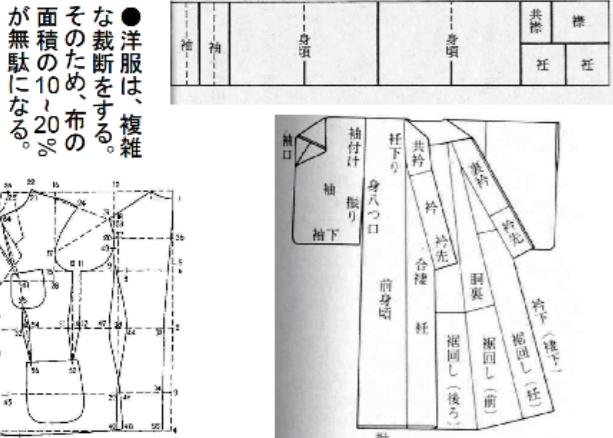
非常に緩やかに着られる衣服としてはインドのサリーが有名です。サリーは布地一枚を体に巻き付けるだけです。

一方、スーツ。これはヨーロッパを中心に発達しましたが、体にぴったり合わせて作ります。

そうすると、サリーは柔軟性で、スーツは剛直性。着物は緩やかに着て帯でぎゅっと締めます。だから、ちょうどこの中間に位置する文化だと思います。

ここからはあまり聞かれたことはない話だと思います。「着物は、もつたいない」スピリットが一杯と題して話します。

その一、「布地を全て使わないのはもつたいない」。着物はこのような要素に分けられます（図⑭）。それぞれの



図⑭ 着物のリデュース機能

表作: 米・木綿		裏作: 菜種・麦									
1月(新暦)	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
米											
菜種											
木綿											
麦											

図⑮ 農村の年間スケジュール

皆さん方は、一年間にどれぐらい休日がありますか。だいたい土日はお休みですね、プラス祭日。当時の人はどれぐらい休んでいたかというと、弥左衛門さんは一八六四年の一年間で約一ヶ月の休日を取つています。休日といつても全日ではなく、半日休なども入れて一ヶ月です。面白いのが、村全体で一齊に休む日が六日ありました。どんなときに休むことになります。武庫川から取水している昆陽池から水を引くため、村ごとに順番が決められ、田植えの時期は限定されています。だから、村一齊に田植えをして、終わつた後ちょっと休みましょうとなる。そういう形で、一年のうち六日は村全体で休みます。

あとは異弥左衛門さん宅で休んでいるのですが、その休日をどのように過ごしていただようか。

異弥左衛門さんの家の氏神様は建速神社で、ここにお参りをしています。今でもありますね。その近くの大空寺には頻繁に参っています。それ以外に昆陽寺、中山寺、甲山の神呪寺、清荒神、門戸厄神、西宮の戎さん、箕面の竜安寺、能勢の妙見山、近隣の神社仏閣を月に一回、順番にお参りしています。非常に信心深い一家であったわけです。

娯楽は村相撲だったようです。近隣の村と一緒に年五回ぐらい村相撲があり、おらが村の力自慢の若者が村代表で競い合つて、一喜一憂したという娯楽がありました。それから人形芝居で、これが年に一二回。こういう一年を過ごしています。皆さん、こういう暮らしはいかがですか。垣間見るだけで良いですか。

着物文化とエコロジー

最後に、環境を大切にする国崎クリーンセンターでの講演と言うこと



図⑯ 着物のリサイクル機能



図⑰ 着物のリサイクル機能

古着を買って、帯で締めて着ました。着物の古着文化が発達したのも、着物のリユース機能によります。

三つ目は、「着物を再生しないのはもったいない」。着物は縫い糸を取り去ると長方形になります。それをもう一度染め直すわけです。そうすると新しい着物が生まれます。すなわちリサイクル機能が発達しているわけです。

私が小さい頃は家庭でも着物を洗い張りしていました。新しい布地を作っている風景が、町内の路地でも見受けられたものです。

こういうふうに着物は現在のエコの観点から見ても、とても優れもの

であるわけです。

おわりに

私たちの先輩たちは自然をとてもたくさん利用して、自然とともに暮らす工夫、知恵を駆使して生活していました。

今回の衣の文化に焦点を当てた話からも、よく分かると思います。本当にすごいなど感心します。ところが、二十世紀以降、駄目になりました。余りにも科学技術が発達しました。繁榮しすぎました。そして地球を病気にしました。これでは駄目です。

もう一度、私たちは先人たちの英知を学んで、里地・里山を掘り起こして、自然と共存する手段を見出さないといけないと思います。

そこで、その先陣を切つて「北摂里山」だというエールを送り、私の話は終わらせていただきます。御静聴ありがとうございました。

★ 日本の国土の六十六%は森林で、フィンランド、スウェーデンに次いで第3位である。その内、人間の活動によつて、原生林が改善されて形成された人工林が四十%である。

環境省は、里山を里地・里山とよび、自然と都市の中間地と位置づけている。

★ 日本においては、長年、人間が自然の一部分として、自然と共に生き、里地・里山の自然資源を利用しながら、暮らす知恵を多く蓄えてきた。ここでは、衣文化に視点を当てて、蓄えた知恵を学んできた。

★ しかし、二十世紀では、人類は、科学技術を発展させ、繁榮した結果、病んだ地球が存在する。

二十一世紀では、もう一度、先人たちの英知を学び、里地・里山を掘り起し、自然と共存する手段を見出したいものである。

★ 北摂里山が、その先陣を切つて、里山の持つすばらしさを、伝えていただきたいと念願している。